

## 身体の可能性と人間関係学 — 私であること、つながること —

三 井 悦 子

「身体とは、私がそれによってあらゆるものに触れ、あらゆるものが私に触れる、そういう広がり（延長）です。」 ジョン＝リュック・ナンシー<sup>1)</sup>

### はじめに

気持ちとかけ離れた言葉がふと口から発せられたとき、すぐさま「それは嘘です」「口先だけののでたらめです」とからだははっきり表明する。微笑んだつもりの頬がピクッとひきつったり、うれしいっ！と言いながらその目がうろたえていたり。言葉がどのように申し出ようと、からだはそれが本当かウソか、どのくらい本当かをピシャリと言い当てる。

言葉を尽くせば尽くすほど、自分の「ほんとう」から遠ざかることを経験するとき、もちろん言葉を自由に操作できない自分の語彙力の不足もさることながら、からだが知っていることの多さや正確さには驚かされる。

からだはなにより正直である。

同時にからだは、おしゃべりでもある。

今の自分の状況をじょうずに物語っていることはいうまでもなく、これからどうしたいのか、どうしたくないのかをからだは雄弁に物語る。いやむしろ、からだは叫んでいるといってもよい。わたしの考えはこうだ！と一生懸命に訴えかけている。誰に向かって訴えかけているのか？もちろん、第一には、自分自身に対してである。

われわれは、外界からの刺激を情報として収集し、それらを分析し、判断し、そして次の行動を起こす。こうしたインプットからアウトプットまでの行動のサイクルのなかで、からだはひとつの重要な情報源となる。からだは自分自身に「私の思うところ」をフィードバックしようと、訴えかける。また同様に、向かい合って話をしている相手に対して「もっとわかってほしい」と身を乗り出し、隣に座った他人に対して「これ以上近づいてこないで」と縮こまる。さまざまな気持ちだが、からだから滲み出ている。

このようにからだは、感覚器であり受容器であり、また同時に反応器でもある。

しかしながらこうした正直でおしゃべりなからだの声を、すべての人が容易に聞き取っているわけではない。対面する人や隣の人も、かれらのからだは何を言おうとしているのか気づかないでいることも多い。

多くの人が、からだの声に気づかないのはなぜだろう？

からだからの声が小さいのか、聞く耳を持たぬからか、他からの音が大きすぎるからか、そ

れとも、からだがしゃべることなどあり得ないという思い込みからだろうか？

今、われわれが抱えている問題の多くが、からだの声が聞こえないということから生じているといっても過言ではない。

「身体の可能性と人間関係学」と題する小稿では、まず始めに、からだがもつ力について論じ、つぎに自分理解とからだ認識の関係、そしてこれらが人と人との関係性を劈くにおいて秘めている可能性について考えてみたい。

## 1. <からだ>がもつ力

### 1) <からだ>ということについて

「身体の可能性」と題しながら、これまで<からだ>という言葉を用いてきた。まずはじめにこの用語について説明しておこう。

なぜ<からだ>という語を用いるのか。

それは、まず第1に、本稿の論議においては、死体解剖から始まる近代医学が対象とする「肉体」ーパーツに分けて取り出すことができ、また取り替えることを可能とするようなーの理解を超えて、「身体」の可能性にアプローチしようとするからである。そしてさらには表層的な「身体」にとどまらず、見えない「身体」にも論議の重要なポイントが置かれている。「肉体」や「身体」は、Körper, Leib (Body) の訳語であるが、本稿では、そこに seelisch (spiritual, soulful) なものを含んだ、いまここに生きているわたしの身体というものを視野に入れたい。これらを表現しようとするとき、日本語ではより適切な言葉がある。それが「からだ」である。

『字訓』によれば、「から」は外皮・外殻を意味するもの、草木の幹茎など、ものの根幹をなすもの、血縁や身分についてそのものに固有の本質をなすものなどをいう。…人には「からだ」という。」とある。

続いて「野口体操」の創始者、野口三千三の考える「からだ」について触れてみよう。彼は、「からだ」の「から」について次のように語っている。

「から」は、空、虚、洞、殻、穀…でもある。それはなつかしく安らかな安息の場であると同時に、或る神秘的・呪術的な働きによって、はかり知れないあやしい何事が起こることを予感させる「内部空間」をもつことがその本質であろう。」<sup>2)</sup>

そのものに固有の本質をなすものという「から」の意を、野口は一步進んで「はかり知れないあやしい何かが起こる場」それが「からだ」の本質にあるという。このような視点は「身体の可能性」を探ろうとする本稿にとって、大きな衝撃である。野口のこのような「からだ」観において、人間の身体の機能は次のように理解されている。

「胴(から)こそからだの原初存在であって、頭・手・足というものは、もともといつもそこにあるあるべきものではなく、必要な時だけ新しく胴体の奥の中身がそこに伸びて行って、必要な仕事をし、それがすんだら捨てられ消え去るか、胴の中に戻すかするもの」であるという。<sup>3)</sup> 彼の前提には、むくろ(身・体・軀・骸)が身の胴体の部分を指す、という理解がある。つまり、原初生命体としての人間の姿は液体に満ちた袋状のものであり、筋肉や骨格はそこにプカプカと浮かぶものと考えられているのである。考える頭や道具を駆使する手足は、あとから必要に応じて突出してきたものなのである。

当然のことながら、野口体操は、彼のこうした「からだ」観に依拠して成立した。たしかに、人間の骨格は理科室の人体骨格模型のように、支柱の釘に引っ掛けぶら下げられているわけで

はない。皮膚という皮袋のなかで筋肉と水分に包まれて流動的に存在している。このような身体にとっての自然や良好な状態は、それ以外の現在当たり前とされている身体の自然や良好、健康とはおのずから異なってくるだろう。

「「から」のもっとも本質的なことは、その内部空間から、それにとってのすべてのものが、新しく生まれるということである。それがそれであるためにもっともたいせつなものが、そこから新しく生まれ、育ち、みえるということである。」<sup>4)</sup>

それにとってのすべてと言ってもよいもの、それがそれであるためのもっともたいせつなもの、からだはそのようないのちあるものが生まれ、育まれる場として生き生きとイメージされている。種子植物にとってそれは「穀」であり、哺乳類・人類にとってそれは「子宮」であると野口はいうのである。

本稿もまたこのようなからだ観に立ちたい。からだは普遍化することのできない最も個人的な場である。しかも固定しているのではなく流動する。あやしい何かが生まれる場であり、そこは勢いやほとぼしる生氣、いのちを孕んでいる。このように、「肉体」とか「身体」という語によっては表現できない生命感あふれるものとして、本稿では＜からだ＞という語を用いる。

## 2) ＜からだ＞の表情、わたしであること

先に野口が指摘したように、からだは、それがそれであるためにもっともたいせつなものがそこから生まれてくる場である。いいかえるならば、わたしがわたしであるための、もっとも大切なものの棲み家である。また、演出家竹内敏晴―彼は野口体操を「からだとことばのレッスン」に応用している―はいう。「私」は「からだ」としてここに在り、世界に棲む。「からだ」として他者に向かい合ってたつ」と。<sup>5)</sup> いまここに生きているわたしは＜からだ＞である、「わたしそのもの」をあらわすものは、からだ以外にはない。＜からだ＞こそ＜わたし＞である、という。

冒頭の例のように、微笑んだつもりが頬がひきつる状況は、その人のある感情が、思わず表情に出てしまった例である。意図せず感情や情緒が滲み出るとは「表出」と呼ばれ、「表現」とは区別される。表情はもちろん顔面にだけ表われるものではない。さまざまな感情が、からだ全体をキャンバスにして描かれる。それが＜からだ＞の表情である。無意識のうちに＜からだ＞の表情として表出されている感情、暗黙的な言い分の表明である。表現がある意図をもって随意的に示される行為であるのに対して、表出は、不随意的で内発的である。それは内側から押し出されるかように現われ出る。時には、自分自身も気づいていないような深い情動が、湧き出でるように表情や動きとして現れ、それによってはじめて本人が自分の中に存在するある事実に気づくことさえある。表出されるものは、偽りのない、あるがままのわたしである。

いっぽう、表現においては、実際そうではないことを創り出し、見せかけることも可能である。たとえば、シュープ (Trudi Schoop) は、人間の身体のこのような機能に着目し、そこからダンスセラピーという領域に踏み入っていく。「(我々の身体は) 感情を抑制したり、偽装したり、控えめに表したり大げさにしたり、不正確に表現する方法をたくさんもっている。」<sup>6)</sup>

見えるものがあることによって、かえってほんとうのところを見えにくくしていると言いかえることもできるだろう。じょうずに仮面をかぶるのもまたからだの仕業である。表出という、あるがまま、偽りのないわたしを表明するからだは、正直である一方、とてもたくさんのウソをつくこともできるのである。

頬を引きつらせたり、身をちぢめたりする表出によるからだの表情は、やがて固定化し、その人にとって非常に「特徴的な身体」をつくる。はじめの歪んだ身体は、ある瞬間、ある時期のその人の幾層にもわたる複雑にいくんだ感情を暗黙的に表明したものである。が、その形が固定化することによって、逆に、さまざまな感情をその特徴的な身体の中に留まらせることになる。シュープは、正直でかつウソをつくことのできる「からだ」の機能を利用して、自分を発見したり、固定化した身体のゆがみや脅迫的な動きを緩和したり、固定化を強要するような緊張や感情を解きほぐそうとした。即興的に踊ることが可能な段階にきた患者の場合、この体験は患者にとって自己を確認し受けとめていく重要なプロセスとなる。なぜなら「内から溢れ出てくる運動によって、からだはこれまで気づかなかった感情を語り始める」からである。<sup>7)</sup>

恣意的な構成や準備の余地のない、即興的な動きやダンスによって自分自身でも予想もしなかった動き方、姿勢、ときには発声などが繰り広げられることがある。この感情を自分自身であらためて知ることによって、患者はこれまで錯綜し整理のつけられなかったさまざまな感情に折り合いをつけて、現実という世界に静かにソフトランディングするというのである。<sup>8)</sup>

ダンスセラピーは、患者のレッスンをプライベートレッスンからグループセッションへと発展させ、コミュニケーションをもつことのできるからだを取り戻させていく。

ここまで＜からだ＞が持つ力について論じてきた。からだは、わたしがわたしであるための最後の砦でもあり、自分の意のままにできる数少ない領域であると考えられている。からだとは、わたしがわたしであるといえる究極の場、そしてコミュニケーションを成立させる最小の単位、人間にとって大切な何かを孕む秘め事の場所。しかし、同時に、勝手に感情を表明してしまうような自分自身でも御しがたい、手におえぬ存在でもある。ジャン＝リュック・ナンシーは、さらに身体を個の場と理解することを疑う。このもっとも私的な場とされている身体がもはや個に属するものとしてだけでは存在し得ない、と。身体は人間にとって存在そのものである。しかし、その身体自体がすでに他律的な存在だと彼はいう。

では、わたしの身体とは何を指すのか、＜わたし＞はいったいどこにいるのだろうか？

## 2. ＜わたし＞はどこにいるのか

たしかにひとりひとり人間は、このからだとして個別の生を生きている。

では＜わたし＞はどこにいるのだろうか。それは私の身体と等身大の、同義のものなのだろうか？ どこまでがわたしで、どこからが他なのか？

＜わたし＞は、皮膚という境界線によって区分される内側に存在し、その外側は他であるといえるのだろうか？

### 1) ナンシーの疑い

冒頭ジャン＝リュック・ナンシーは、身体とは広がり・延長であるといった。つまり身体というものは、物理的に遮断された存在ではない。「諸々の身体は「充溢したもの」、充溢した空間ではない（空間は到るところで充溢している）。身体は開かれた空間である、言い換えれば、それは或る意味では、空間的というよりむしろ厳密には空隙を孕んだ空間、ないしは場と名付けうるものである。…身体―場は…尾部も頭部も持たない。それはさまざまに折られ、折り畳まれ、広げられ、繰り返し折られ、陥入し、外部に原腸を形成し、開口部を持ち、外へと広が

り、内へと広がり、緊張し、弛緩し、刺激され、茫然自失し、拘束され、拘束を解かれた一つの皮膚である。」<sup>9)</sup>

しかし次に彼は、「それ自体」の存在をも否定する。「身体「それ自体」は存在しない、触れること「それ自体」は存在しない、延長サレタモノ「それ自体」は存在しない。存在するのは、世界の創造、諸身体のテクネー、意味（感覚）の限界なき重み、地形図的な＝場所記述的なコルプス（共同－体）…」<sup>10)</sup>

身体「それ自体」、延長されたもの「それ自体」は存在しないという。身体はそれ自体としては存在しないというのである。

それ自体として存在していない身体は、個の場として存在し得ない。一般にもっとも私的な場とされている身体は、もはや個の所有物ではなく、何者かに侵入され、その侵入者が多数化するうちに、自分自身が差異化されてしまうような存在であるという。ナンシー自身の心臓移植体験は、身体の自己性を疑う契機となっている。彼は、人間にとって存在そのものであるといわれる身体（コルプス）それ自体がすでに他律的な存在だといい、個を疑う。そして共同体（コルプス）に目を向ける。

たしかに、わたしは、わたしの中で完結してはいない。皮膚という境界を越えた自分の外側と思われる部分でさえ、なお侵されたくないと感じるわたしの領域が存在する。＜わたし＞はわたしの身体を越えたところにまで拡大している。そしてこれと全く反対に、接触するだけでは満ち足りず、なお滲入しあわなければ欠落感に苛まれる＜わたし＞もある。

皮膚という、見ることができ、触れることのできる存在を越えて、見えないがしかしリアルな＜わたし＞は、もう少し広い広がりの中で、他者と＜わたし＞を分有する。＜わたし＞あるいは＜わたしというからだ＞は、相手によってアメーバのように変幻自在となる。へこんだり、突き出したり、伸び上がったたり、限りなく透明になったり、と。<sup>11)</sup> ＜わたし＞は単に皮膚によって分断された自分の身体の中に、他から分離して存在するのではない。むしろ他者となつがっていることが＜わたし＞であることと不可分である。他者と私との関係のなかに、つまり他へのかかわり方のなかにこそ、＜わたし＞は存在し、そこにはじめて＜わたし＞を探しあてることができるのである。<sup>12)</sup>

## 2) 侵入者とは誰か

確固たる＜わたし＞は存在しない。関係の中において形を変え存在することを余儀なくされる、それが人間であり個である。では、そのような変幻自在な存在は＜わたし＞とはいえないのだろうか？＜わたし＞はそれほど固定的なものだろうか？他の何ものにも替えがたい「わたしそのもの」は、確固としたものでなければならないのだろうか？

他者の心臓でしか生き得ない私はいったい誰なのか？ナンシーの問いはこうして始められた。何者かが＜わたし＞に侵入する。侵入者はどんどん増殖し、わたしを差異化しわたしの存在までを脅かす。

この主客を入れ替えて読んでみるとどうだろう。

わたしが何者かに侵入する。わたしはどんどん増殖し、何者かを差異化し、その存在を脅かす。

わたしは、私となる以前に母の胎内に入り（あるいは母の胎内でわたしとなり）、母の異物となり、母に悪阻をもたらし、母の自由を、ときにその生命さえも奪いかねなかった。物理的に母から切り離された後も、なお状況は変わらない。

であるならば、侵入者は「他」で、侵入されるのは＜わたし＞、とは限らない。侵入されたと思いついでいる私自身が、いや生命あるものはみな、＜から＞の中から生まれ出る侵入者としてしか存在し得ない。侵入者として命を生まれ、そして今ここに存在しているのではないのか。

侵入された母体は、異物である侵入者を、たっぷりと温かい羊水に包みこみ、大切に愛で、時を共にする。そして時間をかけて変化していく侵入者と、変化させられていく自分とを、ともに新しい＜わたし＞として受容する。このときすでに、わたしは侵入者ともはや不可分な存在である。しかもやがてわたしからその異物が切り離されようとも、わたしは、それによって変化させられた新しい存在、もはや以前とは異なる存在である。その意味で、将来においてもなお、侵入者と不可分な存在である。このように、他とつながり、変容し、新しい関係性のなかで再生される存在、決して固定化しない流動的で可変的な存在、それもまた＜わたし＞といつてよいのではないだろうか。

新しい関係性の中で再生される＜わたし＞。これは竹内敏晴の人間関係論の中心的なテーマでもある。

人が人に出会うということはどのようなことか、人が、人に対し、人になるとはどのようなことか？このような問いをたて、竹内はまず、＜わたし＞であるためのレッスンを準備する。揺らしやほぐしといったからだのレッスンである。竹内には、のびのびと緩んだからだが感じ、からだが行なうことへの信頼がある。そのために彼は、からだのこわばりを解きほぐし、自分のからだがひとつの大きな筒であるとイメージできるような身体へとアプローチする。そのレッスンは「からだの内なる流れが波打ち、溢れ出し、他者に移り、そのからだを巡り、変容して返ってくる。私はそれに浸され、揺すぶられて新しく生まれること。他人とふれあい、つながり、融け合うということ…そして、情念の爆発も含めて、ともに働き、ともに生きてみることで、管理社会に閉じ込められた「からだ」を解き放っていくこと」と、方向づけられている。<sup>13)</sup> さらに＜出会いのレッスン＞について彼は次のように語っている。

「それはただ、人と人がまっすぐに向いあうことを眼目とする。ひとりひとりが鮮やかに自分であること、を生ききってみることであり、その場に、向かいあうものとしての「他者」を発見することである。いや「他者」として相手の前に立つことだ、と言ってもよい。いわば、「共に生きている場」（共生態としてのからだ）から、ひとりの私が立ち現れることなのだ。」<sup>14)</sup>

このようなレッスンを彼はセラピーと呼ばない。むしろそう呼ぶことを拒否する。出会いは、触れ、つながり、融けあい、変化し、変化させる、このような相互に共有される体験でなければならないと彼は考えているからであろう。

他者がわたしの前に立つとき、相手にとってはわたしが他者である。呼びかけることは応えること、見ることは見られること、触れることは触れられることである。

ナンシーは、身体は、もはや個の所有物ではなく、自分自身が差異化されてしまうような存在であるといった。しかし、ここで見てきたような間身体性のなかで、人は人として人の前に立つということも事実である。そして互いにどちらもが侵入者として互いの中で生き始めること、それを「出会い」と呼ぶのではないだろうか。

### 3. 癒えることとからだ体験

ナンシーによって疑われた＜わたし＞であるが、それを関係性、間身体性の中で相互他律・

融合的に存在するものという理解にたち、つぎに、〈まとまりのあるわたし〉に議論を進めたい。

### 1)「癒える力」

わが身におこる喜怒哀楽を受容できるとき、その人はバランスのとれたまとまりのある状態にある。一方、意のままにならぬ自分を受容しきれぬとき、人は欠落感や喪失感に苛まれ、それを埋め合わせようとして何かを求める。近年のブームともいうべき「癒し」への志向は、このような状況に対する現代人のきわめて受動的な傾向であるといえよう。

元来、「癒し」という思想は、科学の単眼的・近視眼的視野狭窄からもたらされた医学・医療の危機に対して、医療従事者自身への戒めとして提起された。すなわち、単に物体の傷を治す「治」だけではなく、人間としての患者を診る「癒」のどちらもが、患者に接する際に医療者には必要であるとの考えに依拠して提起された概念である。<sup>15)</sup>

中川米造（医療倫理）は次のように述べる。

「癒しの基本のひとつは「こわばり」「こだわり」を解いて、人間を安心できる状態に回復させていくことである。生まれたばかりの乳児が母親に抱かれているときの、あの安心感に満ちた状態。さらに前にさかのぼれば、子宮の中において生命が羊水の中に、自分ではほとんど努力せずにうかんでいる状態。あのような状態を再現させ追体験させるのが、癒しの基本である。」と。<sup>16)</sup>

これは前節に引いた竹内のからだ揺らし、野口体操とも通じるものがある。無自覚のうちに「癒されたい」と思ってしまう依存が巷に溢れているのは、現代の閉塞感の反映であると、竹内は言い、みずから持っている「癒える力」を信じようと呼びかける。<sup>17)</sup>そして「癒える」ことを「安らぐレッスン」によって実感しようとする。「からだの中に海を保っていること、その香りをかぐ、そのゆるやかな温かさにいる。安らぎとはそのことの名にほかならない。」という。<sup>18)</sup>

『字訓』によれば、「癒」という文字は「いゆ」と読む。その意味は、「病気や傷がなおる、全快することをいう。」とある。また、「愈」の初文は、ヨ。愈はその異体の字。舟は盤、余は医療用の小刀。これで脳漿を盤に移しとることを「愈す」という。これで病痛が治まるので、心休まることを「愈」という。字はまた愉に作る。癒はその繁文である。」とされている。

つまり、「癒ゆ」は、本来の力が回復するという意である。からだについていうならば、本来からだが持っている治癒力によって、からだが持つ本来の力、からだが持つ多くの感覚する力を呼び覚まし取り戻し、そしてそのからだにおいて安らぐことに他ならない。

からだは、癒える力を持っている。誰かに「癒される」ことではなく、誰かを「癒す」ことでもない。からだがもっている「癒える」ことへの可能性、これに注意が向けられるべきであろう。

「癒えるとは、実は今まで闇に閉ざされていた広大な世界が開け、それに向かい合う新しい自分の非力さに愕然とすることだといつてよい。」<sup>19)</sup>癒えるということは、また次なる世界に踏み入ること。次なるステージ、そこには恐怖や不安が待ち受けているのだが、勇気をもってそこへと一歩、歩みを進めることによって始められる。広大な自然を眼前にして、たとえ立ちすくんでいても、その両足は大地をしっかりと踏みしめている。それは他の誰もでない私自身の両足である。竹内の「癒える」感覚にはそのような厳しさと力強さがある。

## 2) リアルであることの気持ちよさ

言葉にならない切羽詰った感情、理解はできても腑に落ちない不明瞭感、そうした説明のつかない雑多ではあるが直截的な感覚は、私の存在を揺さぶるように私に迫ってくる。このようなリアルな体験を自身のからだが体験し、折り合いをつけていくこと、こうした「からだ体験」が癒える力を育んでいく。たとえばスポーツがそれである。

何よりもまず、自分の身体を用いて行なわれる行為、そこでの瞬間的な判断、中断や継続、そして達成や失敗がみずからの意思に決定づけられる行為である。一連の行為において分断されない自己を体験することが充足感をもたらす。スポーツはこうした充足の快感に支えられている。自己の領域において処理可能な、終始一貫して主体となる体験は、現代社会において希少である。ここではあえて「主体」といってよいだろう。その存在さえも揺さぶるようにわたしに迫ってくるようなリアルな体験をするとき、「わたしそのもの」をあらためて確認することができるからである。

ナンシーも言っている。

「一つの身体とは、開き、引き裂き、尾部と頭部に空隙を穿つ場である。それらに出来事となる場を与えながら（享受すること、苦しむこと、思考すること、生まれること、死ぬこと、セックスすること、笑うこと、くしゃみすること、震えること、嘆き悲しむこと、忘却すること等々）。」<sup>20)</sup>

からだが体験していること、その見えないもののなかにあるリアルさを、スポーツでは実感する。見えないからこそよりリアルに、より明晰にからだは感じ取ることができる。像として可視化されるものだけがリアルなものだといえるだろうか。いや、見えているものがウソであり、見えないものにこそほんとうがある、ということを教えてくれるものがほかでもない、からだであった。

そしてからだ体験は、さらに多くのことをからだに表明させる。それらによって、わたしは、あらためて＜わたし＞というものの本質を知ることになるのである。

竹内の身体への信頼は、「私」でなく、「からだ」が動き始めること、私でない私が生きて姿を現わしてくるという体験」に基づいている。これはスポーツにおいて遭遇する出来事でもある。過度に緊張した興奮状態の中で、喜怒哀楽がいつきに発現する場面で、全く予期せぬ自分を垣間見ることがある。また、深く集中した静寂の中で、熱いマグマのような何かが生まれ噴出するような感覚を体感し、新しい自分の可能性に気づく場合もある。

深い集中の中で、無意識のうちにからだに応じ動いていく、しかも生き生きと躍動感をもって。そしてそのような時空間を仲間と分割・共有する体験。これほど、スリリングで快い感覚はない。こうしたリアルな体験が、わたしをひとつのまとまりのある存在（ホーリスティックなわたし）として認識させてくれる。全身が統合され、ひとつにまとまるからだ感覚（統一感）は、このからだがわたしそのものであることを認識させる。<sup>21)</sup> これらが、からだが持っている癒える力である。

## 4. つながりへ ～からだとからだで出会うこと

コミュニケーションは何よりもまず言語を通して行なわれるものである、という理解は思い込みすぎないのかもしれない。たしかに言語は人間が人間たる所以、人間がもっている重要な働きのひとつではある。が、＜わたし＞を説明するのは言語によってではないといってもよいのではないだろうか。言語は、私がそうであると思っていること、場合によってはそうあり



たいと思う自分のイメージ、つまりつくられたあるいはつくり出したわたしのイメージを説明し、語るにすぎない。言語にはまず概念が前提となる。普遍性をもつあるイメージが、コミュニケーションを交わす互いの間に存在してはじめて成立するのものが言語である。いや、そうした共通理解が根底にあるものだけが言語化されるといってもよい。その言語によって行きかうイメージを共有するものに限定してのみ、言語は意味のある表現となる。

しかしながらそのような普遍性にそぐわない＜わたし＞の感情や情緒というものが、実際この身の上には存在する。果たしてこれらは言語によって、つまり共通理解を前提にした言葉によって、伝達することができるだろうか。どこまでも個の感覚と共通感覚との間の厳然とした差異を否定することはできないだろう。

こうした普遍化できない個の感覚を正直に物語っているのが＜からだ＞である。そしてからだが語ることば（からだことば）によって、はじめて相手に何らかの感覚が伝えられるのである。

ことばもなく身をよじって悲しみに耐える姿、錯綜する理由（reason = 原因・理性）に整理もつかず、ただ呆然と立ち尽くす姿、このようなからだや動き（からだことば）が、相手に何かを訴えかけるのである。このときその相手は自分がこれまで体験した範囲内での共通する感覚を自分の身に想起し、感情を共有することになる。こうして、悲嘆し、呆然と立ち尽くす相手との相互の関係が劈かれ、＜出会う＞のである。コミュニケーションが、言語を通してよりもむしろ＜からだ＞によって行なわれるというのは、このような理由によっている。

「私」は「からだ」としてここに在り、世界に棲む。「からだ」として他者に向かい合ってたつ」と、竹内が言うのはこういうことであろう。シュープが、からだ体験によって個を解きほぐし、そしてその先にある人と人との関係性へと視点をひろげたのも彼と同様である。

「からだの中に硬くへばりついた苛立ちは、自由な行動を抑制するだけではなく、新たな出会いの可能性も減らしてしまうかもしれない。つまり、将来への期待は、現在のからだが生み出す感情によって左右されているので、硬く組んだ腕やつりあがった肩のままでは、狭く限られた範囲でしか生きていけないのである。」<sup>22)</sup>

胸の前で、右手で左ひじを左手で右ひじを持っているのは、いっさい何者をも侵入させない、そして自分の中からもなにも出さず、すべてをかかえこんだ姿勢である。このような縮こまったからだは、「これ以上私に近づかないで、触れないで」といっており、コミュニケーションを拒否するわたしの表明である。その硬く組んだ腕をほどき、つり上がった肩からふっと力を抜かせ、リラックスした自分のからだの心地よさを感じることから、まずダンスセラピーは始められる。こうして自己の身体を肯定し、自分を受容してはじめて、他を受けとめ、受け入れ、あるいは他の思いに共感できる豊かな関係性をもつことができるようになるとシュープは言う。同様に竹内は「人の身になる」とは、ある瞬間に成り立つ理解のことばかりでなく、それを出発点として、長い時間をかけて相手と築き上げていく「関係」のことであると言う。<sup>23)</sup>

からだ揺らしやからだほぐしは、個人的な場であるわたしのからだ、偶然にもパートナーとなって向かい合った誰かのからだとがつながる、共通体験でもある。パートナーのからだを「もの」として扱うのではなく、自分が発する波動を相手のからだに伝え、入り込み、揺り動かし、互いに変化していく。そのような延長の感覚が自分のからだの中に呼び覚まされ、つながりの波動が往復し、互いを劈いていく。

関係をとりむすぶということは、たとえばこのようなつながりの感覚を前提にしているにちがいない。したがって、また「身体のような入口のコルプス（共同－体）」<sup>24)</sup>が劈かれること

が求められているのである。

## 註および引用文献

- 1) ジャン＝リュック・ナンシー『侵入者－いま＜生命＞はどこに？』西谷修訳 以文社 2000 55頁
- 2) 野口三千三 『原初生命体としての人間』三笠書房 1972 220頁
- 3) 野口三千三 同上書 220頁
- 4) 野口三千三 同上書 220頁
- 5) 竹内敏晴 『思想する「からだ」』晶文社 2001 107-108頁
- 6) Trudi Schoop *Dance Thrapy* (平井タカネ他訳『からだの声をきいてごらん－ダンスセラピーへの招待－』小学館スクウェア 2000 60頁)
- 7) トゥルーディ・シュープ 同上書 121頁
- 8) トゥルーディ・シュープ 同上書 61頁
- 9) ジャン＝リュック・ナンシー 1) 14-15頁
- 10) ジャン＝リュック・ナンシー 『共同体 (コルプス)』大西雅一郎訳 松籟社 1996 85頁
- 11) これは前述した野口三千三の身体観そのものである。皮膚という皮袋のある部分が、必要に応じて内発的に外へと押し出され、必要な機能を果たし、用が済めばまたもとの場所に収まるのであるから。また「尾部も頭部も持たない」は、からだの原意「むくろ」が首のない身を示すのと同義である。野口とナンシーに共通するこの身体観は何かを暗示的に示唆するものと思われる。
- 12) であるならば、「自分探し」の落とし穴というものに気づくだろう。探すべき「わたし」は「わたし」を内省するだけでは見つからないのである。
- 13) 竹内敏晴 『「からだ」と「ことば」のレッスン』講談社現代新書 1990 180-181頁
- 14) 竹内敏晴 同上書 181頁
- 15) 中川米造 『学問の生命』佼成出版社 1991 69頁
- 16) 中川米造 同上書 182-183頁  
とくにここでは「癒し」の概念が必要とされるに至った経緯を確認しておきたい。医療倫理あるいは医学概論 (medical humanities) という立場から、中川は、「現代医学は、まず肉体から精神を切り離し、生活から神秘を捨てる合理的精神によって始められた。医師が病人において見るのは、肉体的な生理的な異常や偏奇でしかない。…魂を否定した医術はもはや合理性のみを基盤とする技術者とならざるを得ない。それでは病む固体の、感性的な救済への要請に応えることはできなくなる。また、固体の苦痛に共感をいだく社会の声に真に応え得なくなる。ここに、病者の主体性をも考慮に入れた技術が登場せざるを得なくなる理由がある。」と言う。  
また、病者の側が感じる状態 (illness) と、医師の診断によって成立する病 (disease) を射程に入れる。diseaseは、明らかに身体内部に病気の実態があるものであり、それを除去したり無力化したりすることによってこれは治る。(これが西洋近代医学のパラダイム) しかし、このようなパラダイムによって対応可能なケースは実際にはきわめて少ないという。病む人間にとって「治癒」の「癒」に相当する部分はまだ処置されていないからである。このような立場にたって、中川は非合理的な人間の主体性を科学の名の下に提出し、医療にまつわる矛盾や問題を実践的に解決しようとして、「癒し」ということばを見直すことにした。中川のこうした出発点を理解すれば、近年の「癒し」ブーム－治してもらうこと、癒されることを期待するきわめて受動的な「治る」感覚の風潮－の誤謬に気づくだろう。
- 17) 竹内敏晴 『癒える力』晶文社 1999 171頁
- 18) 竹内敏晴 同上書 128頁
- 19) 竹内敏晴 同上書 175頁

20) ジャン＝リュック・ナンシー 10) 14-15頁

谷川俊太郎の詩「生きる」にどこか似ている。「生きているということ…くしゃみをする事 あなたと手をつなぐこと…泣けるということ 笑えるということ 怒れるということ 自由ということ…人は愛するということ あなたの手のぬくみ いのちということ」

21) ダンスや瞑想, ヨーガ, 太極拳などは「癒しとしての…」とか「癒し系のスポーツ」などと今風に  
取り上げられることも多い。しかし、これらの活動は、セラピーとか癒しなどの冠をかぶせなくとも、  
それ自体が、もともと全身の統合感をもたらすような身体文化である。このような身心の働きに関係  
する統合的な「全身運動」については別稿にゆずらなければならないが、いくつかの問題点を提起し  
ておきたい。まず、全身が統合される、というとき、統合される以前の全身とは何を指すのか？全身  
ははじめてからひとつのものとして存在していると理解されているのか、それともパーツに分けられ  
たものを総称して全身というのか？そして何を全身運動と呼ぶのか？などである。たとえば太極拳は全  
身運動ではある。しかしこれは全身が動いているから全身運動であるというのではない。下肢による  
前後左右への体重移動は、骨盤の回転運動によって導かれる。つまり、左足を一步前に出そうとする  
ときには、立位姿勢の中心にあった骨盤の左側を前に回し出す（真前ではなく、脊柱を中心にして  
時計回りに回転するように）ことによって、左脚は前に投げ出されるのである。このとき、右肩はう  
しろに引かれる形になる（引くのではなく、脱力して骨盤の上に上半身を乗せておけば、骨盤の回転  
に伴って、上半身は自然に半身になる）。このような、片方の足を出すというひとつの動きが、上半  
身の動きまでを制御しているという意味で、太極拳は全身に連動する運動＝全身運動である。脚と骨  
盤と胴と胸と首と頭の連関がある。ひとつの動きの発現は、こうしてつらなり、動きの波動となり、  
からだをひとつのまとまりとなす。

全身運動と全身の一体感・統一感について、興味深いエピソードがある。数学者岡潔は、人はいつ  
「1」を認識するのか？との自問に対し、自身の孫の成長の観察をとおして、生後およそ18ヶ月で  
「1」が発見されると直感した。18ヶ月というのは、乳児が全身運動をし始めるころであり、全身運  
動の初めての瞬間に人間は「1」を発見するのだと岡は言う。「1」というある種の数学的真理の発  
見は、宗教的な神秘体験と同じような直感的なものであるという。（岡潔・小林秀雄『対話 人間の  
建設』新潮社1965）

岡のこの「1の発見」について、哲学者山折哲雄は「人間というのは、このようにいのちの運動を  
する。身と心の運動とが一致している」と感動を隠さない。山折はさらにヘレン・ケラーの奇跡に触  
れる。奇跡はどのようにして起こり得たかを、次のように述べる。

「彼女は生後19ヶ月で熱病に罹り、その後、三重の障害を持つに至った。岡潔の言う18ヶ月をわ  
ずか1ヶ月ではあるが経験していた。このときすでに彼女は全身運動を行っていただろう。そして「1」  
を発見していた。したがって、奇跡は起こりえたのである」と。さらに、山折氏は人間が18ヶ月で  
「1」を発見するとき、「1」だけではない、同時に「全体」を発見するのであると。その全体という  
のは「宇宙」とか「自然」、「自己」に対する「他」とも言ってもよいという。（山折哲雄 人体科学  
会第11回大会、人体科学フォーラム（吹田市文化会館、2001年11月23日）での講演「アジアの＜こ  
ろ・からだ・いのち＞」による。）全身運動がもっている深い意味を、岡も山折もこのように解釈し  
ているのである。

22) トゥルーディ・シュープ 6) 61頁

23) 竹内敏晴 17) 56頁

24) ジャン＝リュック・ナンシー 1) 42頁